

学道一如

発行 高校 双葉部
小樽新聞部
2026年5月8日
第9号

小樽再発見⑲ 南小樽駅

道内最古の駅、桜の名所

通称「南樽」と呼ばれる南小樽駅。その歴史をこ紹介します。



85年間使用された鐘

市民と観光客を共に支え、道内現存最古の駅、また桜の名所としても知られる。

戦艦大和の完成から85年

最強の兵器と抑止力

皆さんはこの世界で最も政治的な影響力が大きい兵器を知っていますか。現代では核兵器がそれに当てはまり、第二次世界大戦後から開発、研究が行われてきました。それ以来、最も強力な兵器として欧米諸国を中心

戦艦大和の航跡



第1回

の威力は、1発で都市が壊滅するほどであり、その最たる例が広島、長崎の被爆です。特に厄介なのが、被爆地点の

汚染です。爆発直後の破壊力と、その後の汚染を併せ持つ核は最強の兵器と言えるでしょう。現代では核の威力は増大。破壊力は初期の数百倍ともなり、核ミサイルの登場で到達生も向上しました。ところが、強力な核兵器は第二次世界大戦後の実戦では使用されていません。それは、一國が核を使用すれば、報復で双方が甚大な損害を被る可能性があるからです。また、世界各国がそれぞれ勢力を拡大するために、核を用いた世界大戦が勃発すると人類の存続が危ぶまれることも予想されるからです。そのため、現代の戦闘において核戦争が発生する可能性は極めて低いのです。それでも核兵器は、国家間で強い抑止力となり、恐怖による平和を創り出しています。また、通常兵器に限った場合、航空母艦(空母)の存在も大きな政治的影響力を持ちます。空母は海上に浮かぶ航空基地であり、地球上如何なる戦地へも自由に

南小樽駅はJR北海道が保有する函館本線の駅であり、札幌から14駅目であるため、駅番号はS14、特別快速、快速、快速ニセコライナーなどが停車する主要駅で、『南樽』の愛称が定着し、桜の名所として親しまれている。

駅名が三度変わった

歴史は古い。一八八〇年、幌内から手宮を結ぶ官営幌内鉄道の停車場の一つ『開運町駅』として開業した。手宮駅が貨物駅

南小樽駅の歴史

- 1880年 幌内鉄道開運町駅開業
- 1881年 住吉駅に改名
- 1888年 北有社へ運輸業務のみ譲渡
- 1889年 北海道炭礦鉄道へ移管
- 1900年 小樽駅に改名
- 1906年 官設鉄道へ線路が移管
- 1907年 帝国鉄道庁へ移管
- 1909年 函館本線と手宮線に分離
- 1910年 手宮線複線化
- 1920年 南小樽駅に改名
- 1943年 手宮線単線化
- 1949年 日本国有鉄道へ継承
- 1958年 現駅舎となる
- 1962年 手宮線 旅客運用廃止
- 1965年 小樽-南小樽間 高架化
- 1968年 貨物扱い廃止
- 1982年 電化
- 1982年 荷物扱い廃止
- 1985年 手宮線廃止
- 1987年 北海道旅客鉄道へ継承
- 1988年 コンビニ併設
- 1999年 自動改札設置
- 2022年 バリアフリー化

であったのに対して、開運町駅は旅客の役割も担っていた。一八八一年、火災により、『住吉駅』として再建された。当時の駅周辺は問屋街として小樽の中心となり、物資や人の往来が盛んだった。一九〇〇年、『小樽駅』と改名した。しかし、三年後、『小樽中央駅』が開業したことで、駅名を巡る論争が起ころうようになった。一九〇四年に現小樽駅は郡名から『高島駅』へと改名し、この翌年から

が施されたことで戦艦と呼ばれる艦種へと進化を遂げていきました。しかし、戦艦という艦種は第二次世界大戦以降はほとんど建造されることが無くなりました。そのため、現代で稼働している戦艦は存在していません。

戦艦と世界大戦

戦艦の基準となるのがドレッドノート級戦艦というイギリスが建造した戦艦で、日本では弩級戦艦と呼ばれました。現代では大きさを示すときに「弩級」という言葉が使用されます。その語源となったのが戦艦ドレッドノートです。それほとまでに弩級戦艦の完成は世界に衝撃を与えたものとなりました。その後、小型艦の発展の影響で弩級戦艦を凌駕する超弩級戦艦が登場。これにより、戦艦の設計や従来の戦艦などの装甲艦だけの編成から、小型艦などによる護衛艦隊も含まれる編成とす

古い時代の面影残す

かつて函館本線と手宮線が乗り入れ、貨物の取り扱ひもあった南小樽駅にはその痕跡が残されている。正面出入口から右手には『迎い鐘』が設置されており、正面右側から背面へは出入口の痕跡(曲線の階段)が残されている。二〇二二年にはバリアフリー工事が完了しており、跨線橋も架け替えられたが、旧跨線橋の面影が引き継がれている。(坂東元)

るなど、艦隊の組み方にも影響がありました。戦艦の全長は200メートルを超えるようになり、主武装である主砲の口径は30センチ以上、施された装甲は自艦の砲撃にも耐えられるように設計されていきました。より大きい船体、より巨大な大砲を搭載する戦艦を求めると、この考え方が主流となりました。第一次世界大戦頃になると、より強い戦艦を求めた建艦競争が行われ、国家の財政を圧迫するようになり、大戦後は新たな世界大戦を防ぐ目的で、ワシントン海軍軍縮条約が締結され、列強各国には戦艦などの主力艦の保有艦の制限が付与されました。それ以降、軍艦の建造の技術が低下すると考えた国々は、如何に海軍を弱体化しないようにするかに苦悩し、密かに新型艦の建造計画などを進めていきました。(続く) (坂東元)